



Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

なしむ

Vol.12
2003 SPRING

From Korea

韓国から医師等を招聘

People

被爆者医療研修を
終えて感じたこと…

Korea Report

韓国の医療機関を訪問

NASHIM 研修機関紹介 1

長崎大学医学部附属
原爆後障害医療研究施設

Report

カザフスタンから管理職員来崎

放射線医療科学国際コンソーシアム
第1回長崎シンポジウムに参加

Information

核禁会議がナシムへカンパ金を贈呈
ベラルーシ共和国政府から感謝状



被爆者医療研修のため来崎した韓国人看護師たち(於:日赤長崎原爆病院)

韓国から医師等を招聘

ヒバクシャ医療の研修と交流を目的として、韓国から2月と3月に医師2名、臨床病理士1名、看護師3名計6名が来崎しました。これでNASHIMが韓国から招聘した研修者の人数は平成7年度以来27名となりました。

研修者一行は長崎原爆資料館をまず見学。原爆被害のすさまじさに驚いていた様子でした。その後平和公園や、原爆落下中心地、朝鮮人被爆者慰霊碑を見て回りました。

翌日から、日赤長崎原爆病院や長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム、長崎大学医学部附属病院、



長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設で研修

長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設、放射線影響研究所の順に研修や視察を行いました。

長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設では、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故やセミパラチンスク核実験場周辺の被ばく者医療を支援する「遠隔医療診断支援システム」を視察しました。衛生通信などでベラルーシ共和国やカザフスタン共和国の関連施設から送られてきた被ばく者の超音波画像や細胞組織画像を同大学の医師が診断している現場を見た研修者たちは、興味深そうに盛んに質問をしていました。



長崎市原爆被爆者健康管理センターを視察

2002年度・後期 韓国人医師等受入研修者名簿

研修期間	所属	職名	姓名
2月24～3月5日 (10日間)	仁川赤十字病院	院長(放射線科医師)	ヤン・ジュヒョン 梁 宙鉉
	ソウル赤十字病院	外科科長(外科医師)	ピョン・ソンファン 邊 聖煥
	大邱赤十字病院	臨床病理室長(臨床病理士)	パク・ジョンテック 朴 鍾澤
3月10～3月19日 (10日間)	統営赤十字病院	看護科長	ファン・ビリョン 黃 必蓮
	居昌赤十字病院	看護師	ペー・ジョンスクック 裴 正淑
	尚州赤十字病院	看護師	キム・サンヒ 金 尚姫

PEOPLE



平成14年10月に研修に参加した 梁 慶鎬室長

被爆者医療研修を 終えて感じたこと…

大韓赤十字社居昌赤十字病院
放射線科室長

梁 慶鎬

長崎滞在期間中は、関係者の方々からとてもよくしていただき、本当にありがとうございました。10日間という短い期間でしたが、未だに忘れられない追憶として心の中に残っています。

研修を通して感じたことは次のとおりです。

まず一つ目は、原爆と関係する多くの機関を訪問し、施設を視察しましたが、どこに行ってもその機関のトップの方がいつも私たちを迎えてくれる準備がされており、一度も時間に遅れたり訪問できなかったことはなく、彼らの時間観念と準備性が際だって目立ちました。

二つ目は、日本は原爆被害者たちのためにどんなに財政的・行政的に治療や福祉のため努力してきたかを十分に見ることができたことと、それは官と民がすべてにおいて体系的・効率的に行っているものと思われました。

三つ目は、長崎で直接行き当たりばったりに入った多くのスーパーや食堂、ホテル、店はもちろん、タクシーで会った日本人たちの、体に染みついたような親切や微笑を含んだやさしさは私たちとは多くの差を感じました。

四つ目は、少なくとも我々研修者が行くところはどこもゴミくずやたばこの吸い殻をひとつも見つけることができず、訪問機関や施設はもちろんのこと、公園、駅、市場、飲食店街などで見た感じは、本当に清潔だということでした。

五つ目は、これは通訳や留学生たちから共通して聞いたことですが、日本は長期不況に陥っていて、多くの日本人が希望や意欲を失っているということです。また、物価が高い反面、年をとると社会保障制度が行き届いていることも国民性の肯定的な発達ではありますが、一部短所として現れているところがあるようです。

以上、長崎研修中に感じたことをいくつかあげましたが、このような研修の機会を与えてくださった方々に、この紙面をお借りしてもう一度感謝の言葉を申し上げ、研修のお礼のご挨拶といたします。



長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設で研修

KOREA REPORT

韓国の医療機関を訪問



陝川高麗病院を訪問



慶熙大学慶熙医療院を訪問

ナシムでは、韓国からの被爆者医療研修者の派遣について韓国側と協議するため、長崎大学医学部の朝長万左男教授と塚崎邦弘講師を去る1月16日～18日、韓国に派遣しました。

また、これまで韓国からの研修者は大韓赤十字社傘下の病院等から派遣されていましたが、今回、枠を広げて、赤十字社以外の原爆被爆者診療協定病院からの派遣について協議するため、

関係医療機関を訪問しました。

慶熙大学慶熙医療院、陝川高麗病院、慶南連合病院を訪問し、ナシムの活動について説明を行い、医師などの被爆者医療研修派遣について協議したところ、いずれの医療機関からも前向きな回答が得られました。これらの病院からは平成15年度から研修者の受入について準備を進めていくことにしています。

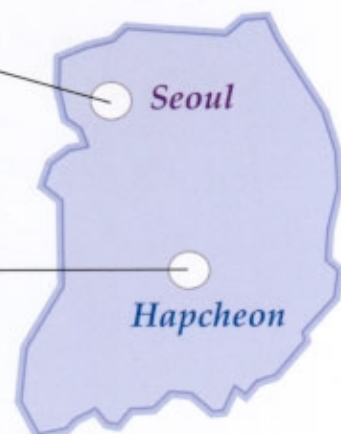
韓国での訪問先

ソウル

- 1月16日
- ・大韓赤十字社特殊福祉事業所
 - ・大韓赤十字社ソウル赤十字病院
 - ・慶熙大学慶熙医療院

陝川 (ハプチョン)

- 1月17日
- ・大韓赤十字社陝川原爆被害者福祉会館
 - ・陝川高麗病院
 - ・慶南連合病院



長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設

長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設（原研）は昭和37年（1962年）に「原爆被爆者の後障害の治療並びに発症予防、及び放射線の人体への影響に関する総合的基礎研究」を目的に設置され、毎年1部門が増設されて6部門が昭和42年（1967年）に完成し、残留放射能の測定、被爆者疾病の病理学的研究、放射能障害の発症機序の解明、白血病や放射能誘発癌の発症機序の解明と治療法の開発などを中心として総合的な研究を行ってきました。

一方、昭和47年（1972年）に「原爆被災の

研究組織としては大きく4部門に分けられ、「放射線障害解析部門」、「分子医療部門」、「国際放射線保健部門」、「資料収集保存部」に教授7名、外国人客員教授1名、助教授5名、講師以下19名、合計32名の職員に加え、多くの大学院生、研究生、留学生らが日夜研究に励んでいます。平成14年度の21世紀COEプログラムに「放射線医療科学国際コンソーシアム」構想が選定され、原研を中心とした放射線医療科学研究の世界拠点が構築されつつあります。

現在、ロシアやベラルーシ、ウクライナ、



本館

実体を明らかにするための諸資料の収集、整理、保存」を目的として「原爆医学資料センター」が設置されました（昭和49年に「原爆被災学術資料センター」と改称）。平成9年（1997年）4月、原爆後障害医療研究施設と原爆被災学術資料センターは整備統合され、新しい「原爆後障害医療研究施設」として再スタートしました。統合後の施設は「原爆被爆や放射線被曝事故等による放射線障害発症機序の分子レベルでの解明と放射線被曝者の遺伝子治療」を目的としています。同時にWHO甲状腺研究協力センターや世界アルバート・シュバイツァー医学センターにも指定され、チェルノブイリやセミパラチンスクなどでの世界的な医療協力活動が展開されています。平成13年11月、増改築により新研究棟が完成し、以前の建物とは見違えるように立派になりました。

カザフスタン、中国などからの研究者9名がスタッフとして参加しており、共同研究を推進すると同時に、NASHIMやJICAでの短期研修生受け入れ指導が積極的に行われ、世界の放射線医療科学分野における人材育成に貢献しています。原研はNASHIM活動の屋台骨を支えているのです。



2号館

カザフスタンから管理職員来崎



NASHIM 放射線疫学会議に出席

カザフスタン共和国から、放射線医学環境研究所のアブサリコフ・カズベック・ネグマトビッチ所長が12月17日来崎されました。アブサリコフ所長は、ナシムの新規事業として今年度から始まった「チェルノブイリ・カザフスタン管理職員研修受け入れ事業」でナシムが招聘したものです。12月24日まで長崎に滞在して、財団法人放射線影響研究所や日赤長崎原爆病院、長崎大学医学部附属病院を視察したり、兼松隆之長崎大学医学部長や塚原太郎長崎県福祉保健部長を訪問して意見交換を行いました。

また、ナシムが主催する放射線疫学会議に出席して、セミパラチンスク地区での放射線ヒバクシャたちの健康状態などについて発表を行いました。

カザフスタン共和国放射線医学環境研

究所は、旧ソ連が1949年以来450回以上の核実験を行ってきたセミパラチンスク核実験場から約150キロに位置しており、1991年に改組、新設された研究所で、セミパラチンスク核実験場周辺の被ばく線量評価や健康影響の研究を活発に行っています。前身は旧ソ連が設置した、カザフスタン風土病研究所で、後を引き継いだ放射線医学環境研究所は現在も当時の検診データを保管しています。

12月18日同研究所は、これまで遺伝子解析などの共同研究を行ってきた長崎大学と学術交流協定を締結しました。アブサリコフ所長は「放射能の人体影響研究で世界をリードする長崎大学との協定は大きな意味を持つ」と語っています。



(財)放射線影響研究所を視察



長崎大学医学部附属病院を視察

放射線医療科学国際コンソーシアム 第1回長崎シンポジウムに参加

文部科学省の「21世紀COEプログラム」に昨年選定された長崎大学の、「放射線医療科学国際コンソーシアム」の第1回長崎シンポジウムが2月21日、22日の2日間長崎大学医学部ポンベ会館において開催され、

ナシムから井石哲哉会長が出席しました。

21世紀COEプログラムは先駆的な研究を实践する大学に科学研究費を重点配分し、世界最高レベルの研究拠点づくりを進める国家プロジェクトです。長崎大学では昨年、世界各地の研究機関などと連携し、低線量放射線の人体影響など放射線医療科学の世界拠点化を進める「放射線医療科学国際コンソーシアム」事業を計画しています。



長崎大学医学部ポンベ会館にて

第1回長崎シンポジウムには国内外から110人の専門家が参加し、初日は朝長万左男原爆後障害医療研究施設長からコンソーシアム事業の内容などの説明がありました。また、チェルノブイリの甲状腺がんなどについての基調講演もありました。

夜のレセプションでは、コンソーシアム事業に協力する団体として、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の井石哲哉会長から「今回のシンポジウムを契機として長崎大学が提唱する「放射線医療科学国際コンソーシアム」が1日も早く設置され、人類の健康と平和に大いに貢献されるよう望んでいます」と挨拶がありました。



レセプションで挨拶する井石哲哉NASHIM会長

Symposium

核禁会議がナシムへ カンパ金を贈呈

平成14年8月8日、核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）全国集会在長崎原爆資料館ホールで開催され、ナシムが核禁会議から他の4団体とともにカンパ金を贈呈されました。

核禁会議は「いかなる国の核兵器にも反対し」「特定政党や政治勢力の干渉をうけず」「あくまでも人間尊重の人道主義を貫くこと」を基調に昭和36年（1961年）に結成され、「被爆者に愛の手を！」を合言葉に原爆被爆者の方々を支援するためのカンパ活動を長年行ってきています。

結成以来、昨年までの間に全国の人たちによって9億5830万円の浄財が核禁会議に寄せられており、この浄財で核禁会議は様々な団体に対して支援を行っています。長崎の被爆者たちに対しては、「のどが渴いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました…」と水を求めながら死んでいった原爆犠牲者の霊を慰めるとともに、平和を求めるシンボルとして「平和の泉」を、昭和44年（1969年）8月、平和公園内に建設しています。また、被爆者健診センターや原



長崎原爆資料館ホールにて

爆被爆者療養センターをはじめ、恵の丘長崎原爆ホームなど多くの施設に検診車、送迎用マイクロバス・車椅子・ベッド・医療機器などを毎年贈り続けています。

また、韓国の被爆者たちに対しては、昭和48年（1973年）に韓国内に被爆者診療センターを建設したり、平成8年（1996年）に開館した陝川原爆被害者福祉会館に医療機器などを贈り続けています。

ナシムは平成14年度活動助成金として核禁会議から50万円のカンパ金を贈呈されました。贈呈式には井石会長が出席し、核禁会議の大谷恵教議長から目録を受領しました。

核禁会議に対しあらためて厚く感謝申し上げますとともに、ナシムとしては世界のヒバクシャ支援のためこのカンパ金を有効に活用したいと考えております。

ベラルーシ共和国政府から 感謝状

平成14年10月23日、第3回日本チェルノブイリ支援会議が東京で開催され、チェルノブイリ支援NGOの一つとしてナシムも出席、ベラルーシ共和国大統領府人道局長から感謝状を授与されました。

会議は駐日ベラルーシ共和国大使館が主催するもので、チェルノブイリ原発事故から16年経過した現在、関係NGOにチェルノブイリ支援について一層の支援をお願いするとともに、これまでの苦勞や今後の要望などを聞き、併せて関係NGO相互の交流を深めることにより、今後の支援活動をより円滑にしていくことを目的に開催されました。

会議はまず、駐日ベラルーシ共和国特命全権大使の挨拶の後、チェルノブイリ事故委員会委員長とベラルーシ共和国大統領府人道局長のそれぞれの立場からの報告がありました。その後、（財）笹川記念保健協力財団の横 治子 室長がチェルノブイリ医療協力事業について講演を行うとともに、チェルノブイリ支援NGO 20団体が活動状況を報告しました。ナシムからも事務

局が出席して、ヒバクシャ医療研修生の受け入れ状況やロシア語での医学教科書出版・寄贈、専門家の派遣・医療技術指導などについて報告しました。

会議の最後に、ベラルーシ共和国大統領府人道局長から各NGOに対して、これまでの支援に対する感謝状が授与されました。

また、レセプションでは、多くのNGO関係者と知り合うことができ、またたいへん有意義に情報交換を行うことができました。

